

## 非正規教員のトランジション

——正規教員を目指す沖縄の若者を事例に——

大阪市立大学大学院 上原健太郎

### 1. 目的

本報告では、非正規教員の学校から仕事へのトランジションについて考える。特に、正規教員を目指す沖縄の若者の生活史から、学校から仕事へのトランジションの途上にある非正規教員の経験とはいかなるものか、その背景にはどのような条件が指摘できるのか、この2点について分析する。

### 2. 先行研究

若者の学校から仕事へのトランジションに関する研究（以下、トランジション研究）は、若年労働市場が大きく変容した90年代以降、盛んに論じられ、多くの知見が蓄積されてきた。それは、フリーター、若年失業者、若年無業者の増加を社会問題の一つとして認識し、その実態と支援について様々な視点から展開されてきたといえる。しかしながら、従来のトランジション研究は、非正規教員が増加しているにも関わらず、正規教員を目指す非正規教員のトランジションを取り上げてこなかった。それは、非正規教員から正規教員へのトランジションが容易に達成されるものとして理解されてきたことに一因があるだろう。つまり、いずれ正規教員としてキャリアを形成することが「約束」されている非正規教員をことさら取り上げる必要はない、という認識である。

### 3. 方法・結果

本報告では、沖縄の非正規教員9名（うち2名は追加調査実施）の生活史を用いる。近年の非正規教員を取り巻く状況として、少子化による採用抑制、受験者数の増加、採用試験の難関化を指摘することができるが、それらが深刻化した地域として沖縄県を位置づけることができるため、沖縄の非正規教員を事例として扱うこととした。

調査結果から、採用試験に向けて勉強時間が確保できないことへの焦り、いつ合格するのか分からないといった不安、受験を見送るといった諦めの側面が明らかとなった。その一方で、「やりがい」「高給」「大卒労働市場への拘り」といった優位な条件が、一時的に、かれらの移行経験を下支えしながらも、結果的に、過酷な状況にかれらを押しとどめている点も確認された。

### 4. 結論

以上、本報告が明らかにしたのは、正規教員を目指し続けることで焦りや不安が蓄積され、やりがい・高給・高学歴といった〈相対的に優位な条件〉がその過酷な状況を深刻化・長期化させてしまうという逆説であった。

高給・高学歴といった〈相対的に優位な条件〉は、これまで、学校から仕事へのトランジションを「手助け」するものとしてポジティブに機能してきた。しかしながら90年代以降、少子化による採用抑制、受験者数の増加、採用試験の難関化など、教員をとりまく社会・経済的状況は厳しさを増している。つまり、非正規教員から正規教員へのトランジションが容易には達成されない状況が生じているのだ。こうした中、学校から仕事へのトランジションを「手助け」するはずの〈相対的に優位な条件〉は、逆説的にも、非正規教員を取り巻く過酷な状況を深刻化・長期化させるものとしてネガティブに機能していた。以上から、社会・経済的状況の変化に伴い、〈相対的に優位な条件〉の優位性そのものが揺らぎはじめている可能性が示唆される。